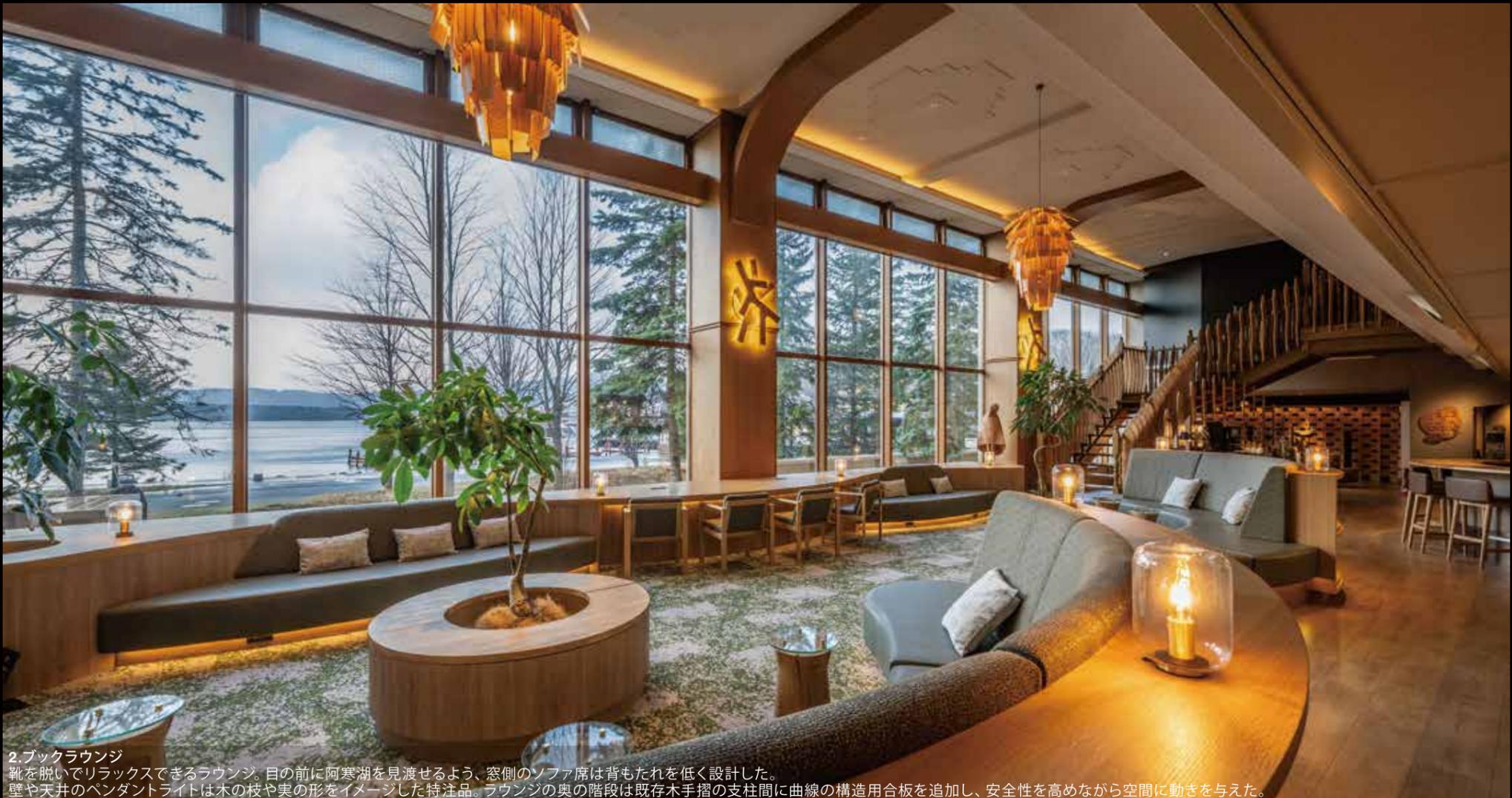




1. エントランス夜景

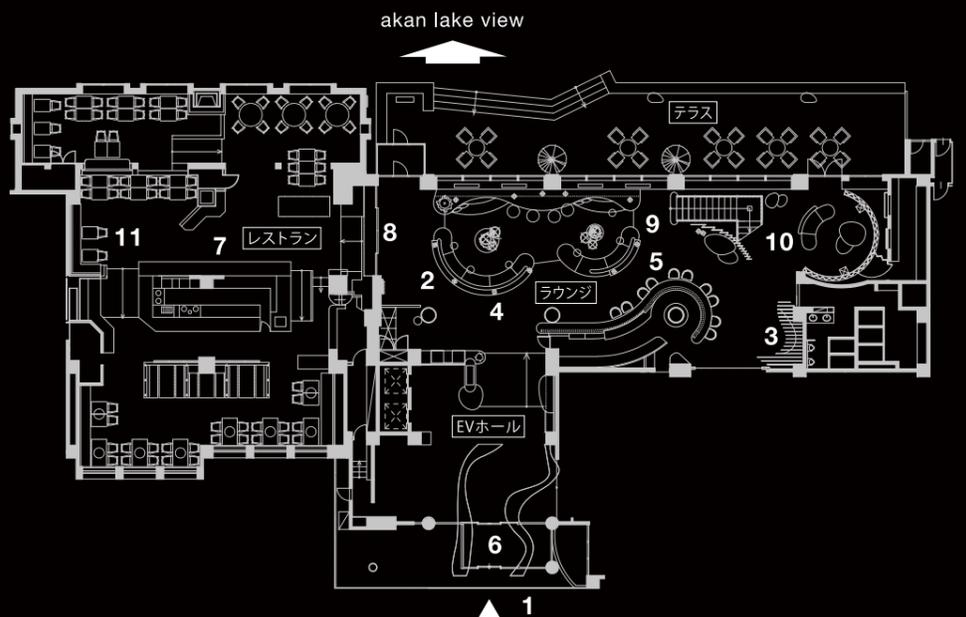
既存ホテルエントランスの構造をそのままに、阿寒らしい木の温かみと遊び心が感じられる空間へとデザインした。底上部のホテルロゴには雄阿寒岳のレリーフを象徴的に用いている。エントランスは構造用合板のトンネルで自動ドアを挟んでおり、トンネルをくぐって内部に入ってゆく高揚感を演出した。



2. ブックラウンジ

靴を脱いでリラックスできるラウンジ。目の前に阿寒湖を見渡せるよう、窓側のソファ席は背もたれを低く設計した。壁や天井のペンダントライトは木の枝や実の形をイメージした特注品。ラウンジの奥の階段は既存木手摺の支柱間に曲線の構造用合板を追加し、安全性を高めながら空間に動きを与えた。

阿寒湖畔に位置するホテルの改修プロジェクトである。アウトドアと温泉を愉しむアクティブな客層が来ることを想定し、「阿寒の深い森を遊ぶ」をテーマに、構造用合板による有機的・冒険的な曲線で全体をデザインした。阿寒湖が目の前に広がる最高のロケーションであることから、やや薄暗いエントランスのトンネルを抜けてぱっと開放的なラウンジにたどり着くようなドラマティックな動線を構成し、訪れる人の心に阿寒湖の風景が焼き付くよう意図している。ロビーには靴を脱ぐブックラウンジや長いバーカウンターをはじめ、エントランス脇のベンチや絵本コーナー、オーディオラウンジなど至るところに気軽に座れる場所を設けて、人々がそれぞれの居場所を自然に見つけて寛げるように配慮した。また、北海道を代表する企業が運営していることから、ここで働くスタッフが北海道の魅力的なストーリーをお客様に語るきっかけになるように、阿寒湖の地図をレリーフにしたり、道産樹種のネームプレートが銅板刻印するなど細やかなデザインをちりばめた。大型高級ホテルとは一線を画した、この場所ならではの心のあるデザインを実現させて頂き、阿寒湖温泉街の魅力向上に貢献できたのではないだろうか。





3.絵本の巣  
子どもがくつろげるよう、鳥の巣のように囲われた絵本コーナーを設けた。



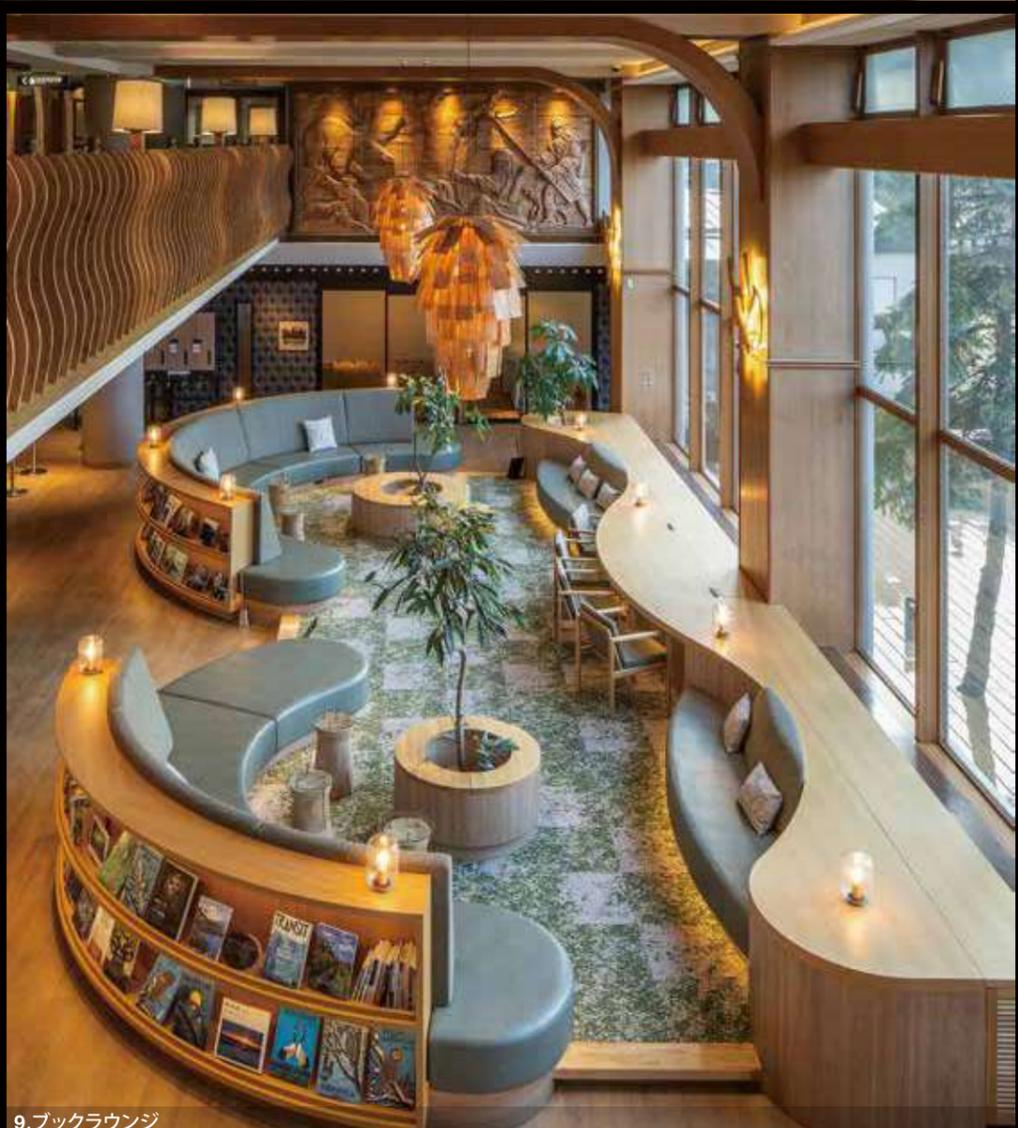
5.バーラウンジ/フロントデスク  
11種類の異なる木を組み合わせた全長12.2mのロングカウンターテーブルが、昼間はフロントデスクに、夜にはバーになる。天井には枝が重なりあうような造形を吊るし、木漏れ日が落ちるようにガラスの照明を工夫した。背面には雄阿寒岳を木でコラージュした。背面の棚は開閉式のフィンが並び、昼間はルーバーになり、夜には扉が開いて中のボトルが見える仕組み。



4.ブックラウンジ  
阿寒の森に関する様々な書籍をセレクトした本棚。大きなカーブを描くことでより美しく、目に留まりやすい。



木材の腐食した部分に銅板を埋め込み、ホテルロゴを刻印したカウンター天板。



9.ブックラウンジ  
湖に向かうラウンジは大きな曲線を描き、人々が好きな場所で視線を合わせず自由に過ごせるように計画した。



6.エントランスのトンネル  
構造用合板で有機的な曲線を構成する。視界をあえて狭くすることで奥に行った時の開放的な阿寒湖の景色をより印象づける。



7.ビュッフェカウンター  
レストランは角材の垂れ壁を立体的に構成した。装飾梁をランダムに配置して木造建築の規模感を演出した。



10.オーディオラウンジ  
Bang&Olufsenのオーディオから流れる音楽に浸りながらくつろげるラウンジ。音の反射と没入感を出すために構造用合板でスクリーンを製作した。彫刻は故瀧口政満氏の作品。少女が月を見上げるようにガラスヒンメリのオーナメントを天井に配置した。



8.レストラン入口  
木造の家の門をくぐる感覚を演出するために、角材の三方枠をランダムな高さにデザインした。



11.阿寒湖レリーフ  
阿寒湖の深さをイメージできるようなレリーフを合板で製作した。冒険家・松浦武四郎がかつて阿寒湖を訪れた際の言葉を引用し、阿寒の旅の魅力を冒険地図として表現した。